

再生産される威信財

朝鮮王朝初期の祭器とその生産

Status Symbols Reproduced:
Ritual Ware and Its Reproduction in Early Choson Dynasty

片山まび

はじめに

①『世宗実録』五礼に見られる陶磁器

②『国朝五礼儀』に見られる陶磁器

むすびにかえて

【論文要旨】

近年、朝鮮時代の祭器についての様々な研究成果が増加傾向にある。しかし多くの研究が様式変遷、および美学的な意味に主眼をおいており、儒教儀礼が朝鮮時代の特異な陶磁器生産体制と深い関わりがある点については指摘はされてこなかった。

そこで、本稿では15世紀代に儒教が朝鮮王朝の統治理念として成立していく過程に着目することとした。具体的には『世宗実録』五礼(1452年)、『国朝五礼儀』(1474年)について比較検討をおこなった。その結果、儀礼の確立過程のなかで、青花を頂点とする陶磁器のヒエラルキーの確立、陶磁器の生産・使用の管理体制の司饗院への集中化の過程という2点が明らかとなった。この2点は、司饗院が司る官窯の成立によって、ひとたび完遂される。その背景には、新興勢力であった朝鮮王家の権力の絶対化があった。

日本においては、権力の象徴は鎌倉以来の価値観によって選ばれた物質文化の伝承によって果たされた。しかし朝鮮王朝では、物質文化は形式を過不足なく伝えるための手段であり、ごく一部の例外をのぞいて常に再生産によって充填されるものであった。このような朝鮮時代初期に成立した陶磁器に対する概念、生産体制はその後生産を強く支配していき、その特異性を生んだと言える。